

Title	現代ドイツ語における<関心の与格>
Sub Title	Ethischer Dativ in der deutschen Gegenwartssprache
Author	中島, 耕太郎(Nakajima, Kotaro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.52, (1988. 1) ,p.116- 101
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩崎英二郎教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00520001-0287">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00520001-0287</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 現代ドイツ語における〈関心の与格〉

中島耕太郎

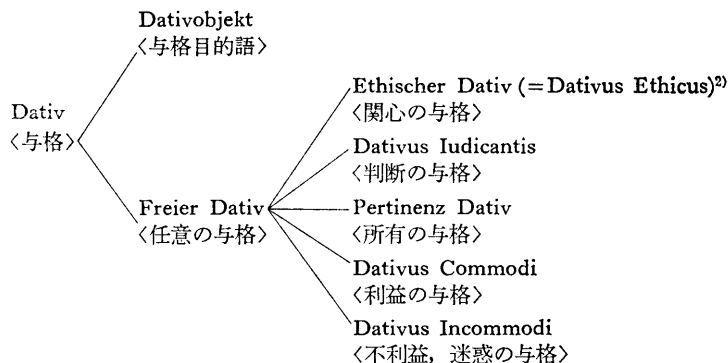
## I. はじめに

- (1) Anna, geh *mir* nicht aus dem Haus!  
(アンナ 家から出るんじゃないよ)
- (2) Es wird *uns* doch nicht regnen!  
(雨が降らなきゃいいんだがなあ)
- (3) Der fährt *dir* glatt an den Baum!  
(おいおい! あいつ滑って木にぶつかるぜ)
- (4) Der wird *euch* noch ausgerechnet dem Kuhlmann den Vertrag anbieten!  
(おい! あの野郎よりもよってあのクールマンに契約をもちかけようって気持ち)

上の例文(1)~(4)に含まれている人称代名詞 *mir*, *uns*, *dir*, *euch* はそれぞれの文の中の定動詞の結合価 (Valenz) によって要求されているものでもなく、また文中の名詞句の結合価によって必要とされているわけではない。このようなかたちで用いられている与格を我々は〈関心の与格〉(Ethischer Dativ... 以下 E.D. と略)と呼んでいる<sup>1)</sup>。

さてドイツ語の与格の用法は、一般的にはまず〈与格目的語〉(Dativobjekt... 以下 D.O. と略)と〈任意の与格〉(Freier Dativ... 以下 F.D. と略)の二つに大別され、F.D. はさらに用法別に下位分類されることとなるが、これを図で示すと次のページの表のようになる。

〈与格目的語〉(D.O.)と〈任意の与格〉(F.D.)の違いをごく大雑把に言えば、前者は文中において述部 (Prädikat) との結び付きが強く、後者はそれが前者に較べて弱いところにある。もちろんこのような簡単な説明で



両者の違いを明確にしたことにはならないし、また事実この問題はこれまで多くの研究者達により、それぞれの視点や立場から解決が試みられてはきたものの、未だ定説が存在しないというのが現状である。また<任意の与格>(F.D.)の下位分類についても同様の問題が残されているのも事実である。

さて本稿で扱われるのは、上記の問題の新しい定義に関してではないことをまず明らかにしておきたい。ここでは、未解決の部分を残してはいるというものの、現在までに至る、<与格>の分野に関する研究者達の成果をふまえた上で、<任意の与格>の用法の中でも、冒頭にあげた<関心の与格>について、主に現代語における使われ方を考察することとする。なお、この種の試みは、シュミット、アブラハム、エンゲレン、ヘルビヒ、ヴェゲナーによって部分的にはなされているものの<sup>3)</sup>、全体の輪郭はまだぼやけたままである。

## II. <任意の与格>の中での<関心の与格>の位置づけ

まずはじめに<関心の与格>が<任意の与格>の中でどのような位置をめているのかを具体的に明らかにしておく必要がある。先程あげた<任意の与格>の下位分類にそれぞれ具体例を示そう。

- (5) Fall *mir* nur nicht von der Leiter!                      <関心の与格>  
(梯子から落ちるんじゃないぞ)

- (6) Der Tee ist *mir* zu heiß. <判断の与格>  
(このお茶はぼくには熱すぎる)
- (7) Er trägt *mir* den Koffer. <利益の与格>  
(彼は私のためにトランクを運ぶ)
- (8) Die Vase ist *mir* zerbrochen. <不利益の与格>  
(花瓶がこわれてしまったよ)
- (9) Ein Stein ist *ihm* auf den Kopf gefallen. <所有の与格>  
(石が彼の頭の上に落ちた)

さてこれらの〈任意の与格〉はまず大きく二つのグループに分けることができるが、その際基準となるのは〈文の命題の内部〉にあるか、〈文の命題の外部〉にあるかということである。ところで〈命題〉(Proposition)とは主語と述語部からなる客観的な陳述内容であり、そこには話者の主観的判断ないしは評価である〈話法性〉(Modalität)はまだ入っていないのであるから<sup>4)</sup>、(5)~(9)をこれに従って分類すると、(5)と(6)は〈命題外〉、(7)(8)(9)が〈命題内〉ということになる。

命題を示す部分	話法性を示す部分 (命題外)
5) (du) nicht von der Leiter fallen	<b>mir</b> , nur
6) der Tee heiß sein	<b>mir</b> , zu
7) er <b>mir</b> den Koffer tragen	φ
8) die Vase <b>mir</b> zerbrochen sein	φ
9) ein Stein <b>ihm</b> auf den Kopf gefallen sein	φ

それでは次に、〈関心の与格〉と〈判断の与格〉を識別する際の判定基準を示しながら比較することによって二つの与格の性質の違いを明らかにしよう<sup>5)</sup>。

- a) 前域能力 (Erststellenfähigkeit) 及びアクセントの有無。

- \* (10) *Dir* fährt der glatt an den Baum. (従ってアクセント不可能)
- (11) *Mir* ist der Tee süß genug.  
(ぼくにはこのお茶は十分甘い)  
(従ってアクセント可能)

b) 名詞用法の有無 (nominale Verwendung)

\* (12) Daß du *dem Vater* gleich einschläfst!

(13) Das ist *dem Kind* zu langweilig.  
(これはその子には退屈すぎる)

c) 疑問文化の可否 (Erfragbarkeit)

\* (14) *Wem* fährt der glatt an den Baum?

(15) *Wem* ist das zu langweilig?  
(誰にとってこれは退屈すぎるの)

d) 関係文の先行詞化の可否 (Relativisierbarkeit)

\* (16) Der fährt *dir*, der du so aufgeweckt bist, glatt an den Baum.

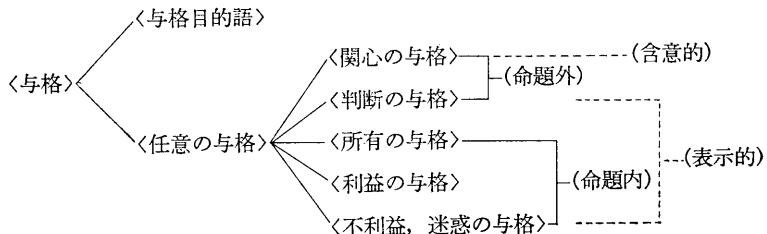
(17) Das ist *dem Kind*, das so aufgeweckt ist, zu langweilig.  
(とつてもませたその子にはこれは退屈すぎる)

e) Für-Phrase による書き換え。

\* (18) Der fährt *für dich* glatt an den Baum.

(19) Das ist *für das Kind* zu langweilig.

このようにみえてくると、二つの与格は共に文の〈命題外〉にあるとはいえず、〈判断の与格〉は表示的 (denotativ) であるのに対し、〈関心の与格〉はその名が示す通り含意的 (konnotativ) なものであることがわかる。以上行なってきた分析を先に示した図に加えてみると次のようになる。つまり〈関心の与格〉と〈判断の与格〉は〈命題〉外であることにより他の〈任意の与格〉から区別され、さらに〈関心の与格〉は〈含意的〉であることにより〈判断の与格〉と区別されることになる。



### III. 〈関心の与格〉の使われる場面

ドゥーデン文法によれば、「関心の与格は俗調の話し方、および文芸作品に特有の言いまわしである。」とある<sup>9)</sup>。またエンゲレンは「関心の与格が使われるのは、ほとんどの場合、格式張らない日常語のレベルであって、わけても命令法の文においてである」と言い<sup>7)</sup>。またヴェゲナーは「極めて打ちとけたニュアンスを持ち、会話を交している者同志が非常に親しい間柄であることを前提とする」と述べている<sup>8)</sup>。

これらの説明は、それぞれ例として挙げてある文をみればある程度の納得はいくのだが、その例文は、ヴェゲナーのものを除けば、古風なもの、即ち古い時代の文学作品からの引用が多く、現在ではもはや使われない表現が多い。

- (20) Du bist *mir* ein hübsches Burschchen.  
(おまえは本当にかわいいやつだなあ)
- (21) Du bist *mir* der Rechte.  
(きみは本当にうってうけの人だね) [反語, 皮肉の場合有]
- (22) Ich war *dir* ein Soldat, und keiner von den schlechten.  
(Claudius)  
(いいか、俺は軍人だったんだ、それも決して下っ端なんかじゃなかったんだぞ)
- (23) Es sind *Euch* gar trotzig Kameraden! (Schiller)  
(しかし強情な奴等だなあ)
- (24) Nur trinkt *mir* alle Neigen aus! (Goethe)  
(さあ遠慮なくブドウ酒を残らず飲んでくれ)
- (25) Das war *dir* ein Kerl!  
(しかしあいつはすげえ奴だったなあ)

十九世紀ごろまでの文学作品になら上記のような表現は多数見うけられるが、現代の文学作品では、このような表現はおろか、〈関心の与格〉の用法そのものを見つけることもむずかしい。それでは現代語では〈関心の与格〉は使われないのかというと、そうではない。ただこの用法は、エンゲレン、ヴェゲナーも言っているように、日常の話し言葉の中で使われる

ので、我々の目、いや意識にとまりにくいのである。ラジオドラマ (Hörspiel) などのような、主として会話から成り立っている作品で、しかも対話している人物同志が親しい間柄にあるものならばしばしばこの用法が見られることがある。次に例をあげよう。

Vater: Also — wenn ein Junge und ein Mädchen bei Tag und Nacht in einem Zelt zusammen sind — dann kann es schon mal passieren, daß . . . äh . . . , daß . . .

(つまりだな . . . 男の子と女の子が昼も夜も一つのテントの中ですごすとだな . . . おこっても不思議はないのは . . . つまり . . . エー . . . そのお . . .)

Sohn: Daß die'n Kind machen?

(子供つくっちゃうわけ)

Vater: Daß du *mir* diesen Ausdruck nicht noch mal in den Mund nimmst.

(おい、いいか、二度とそんな言い方をするんじゃないぞ)

Sohn: Ich weiß aber nicht, was man sonst dafür sagen kann.

(でも他になんていっていいかわかんないもん)

(Papa — Charly hat gesagt, „Pille“ Margarete Jehn)

この場面は、ませた小学生の息子が、公務員である、小市民的で、融通のきかない父親に経口避妊薬 (Pille) についていろいろ聞き出そうとしている場面である。例文中でイタリック体になっている „*mir*“ は、文中において述語動詞が目的語として要求しているものではないし、また他の名詞句から統語論上の支配をうけているわけでもない。つまりこの „*mir*“ は文の命題外にあり専ら父親の感情を写し出す働きを担っているといわねばならない。即ちこれが〈関心の与格〉である。

この „Papa — Charly hat gesagt“ はロコロ・ポケット文庫で六巻のシリーズとなっているものだが、そのうち一巻と二巻で計七箇所この〈関心の与格〉が用いられている。以下文脈は省略するがすべて例をあげる。

(26) He, du, puste *mir* nicht in die Briefmarken!

(おい、こら、切手に息を吹きかけるんじゃない)

(„Rassismus“ Eugen Helmlé)

- (27) Du, hör mal, trampel *mir* nicht ständig das Gras nieder, . . .  
 (おい, こら, 草の上をそんなにドンドン足で踏むんじゃない)  
 („Die Armen“ Eugen Helmlé)
- (28) Bitte, bitte, macht, was ihr wollt! Aber komm *mir* ja nicht  
 vor der nächsten Klassenarbeit!  
 (よし, よし, なんでもいいから好きなことやったらいいだろう,  
 でも今度の試験前には行くんじゃないぞ, わかったか)  
 („Popmusik macht heiter“ Joachim Mock)
- (29) Kauf dir eins, meinerwegen, wenn deine Seligkeit daran hängt  
 — aber das sag ich dir: sonntags ziehst du *mir* das nicht an!  
 (勝手に買えばいいだろう, そんなにそれが欲しいのなら。でも  
 これだけはいっておくぞ, 日曜日にはそんなものを着るんじや  
 ないぞ)  
 („Mode“ Anne Dorn)
- (30) Wehe, du läßt dir was schenken. Du gehst *mir* anständig auf  
 die Straße!  
 (おいおい, そんなものをもらうつもりなのか, 外へ行くときは  
 ちゃんとした格好して行くんだ)  
 („Mode“ Anne Dorn)
- (31) Jetzt geh *mir* mal aus dem Licht, damit ich den Rand hier an  
 dem Bild abschneiden kann.  
 (さあ, 灯りの邪魔にならないようにどくんだ, でないと写真の  
 ふちが切れないじゃないか)  
 („Sexualität“ Eugen Helmlé)

以上の例文をみればわかるように、〈関心の与格〉はいずれも „mir“ と  
 いう形で命令文の中で使われており、すべて父親が息子に対して感情が高  
 ぶった時に発している。しかし命令文の中で使われてはいても、次のよう  
 な例は〈関心の与格〉と見誤ってはならない。

- (32) Dreh *mir* doch nicht die Worte im Munde um!  
 (人の言葉をわざとねじ曲げてとるんじゃない)

この場合の „mir“ も一見すると、〈関心の与格〉と思われそうだが、こ  
 の „mir“ は実は〈jm. die Worte im Munde umdrehen〉という熟語の



中で要求される与格なのである。このような例をさらにあげてみよう。

(33) *Zerbrich mir nichts, vertropfe mir nichts!*

(何もこわすんじゃないぞ、何もこぼすんじゃないぞ)

この場合、定動詞の意味 „zerbrechen“ (壊す) „vertropfen“ (こぼす) を考慮すれば、これらの与格は *Incommodi* <不利益, 迷惑の与格> であることがわかるだろう<sup>9)</sup>。以下次の例も同様である。

(34) *Trage mir den Koffer! . . . Commodi* <利益の与格>

(トランク運んでよ)

(35) *Wasch mir die Hände! . . . Pertinenz* <所有の与格>

(ぼくの手を洗ってよ)

以上みてきたように、命令文中で使われている „mir“ が必ずしも <関心の与格> ではないのである。32)~35) の中で使われている „mir“ は動詞や名詞句の結合価によって要求されているものなのであって、<関心の与格> の場合と違い „mir“ を除去してしまうと、非文にはならないが、文の中の情報が欠除する結果をまねき、文の解釈上重大な支障をもたらすこととなる。

さて話を <関心の与格> に戻そう。„Papa Charly hat gesagt“ の一、二巻で使われていた „mir“ はいずれも父親の不快感を反映した、威嚇的なニュアンスを持っていた。そこでこのシリーズの三、四、五巻をしらべてみると、一、二巻の場合とは異なり <関心の与格> が使われている文は一つしかない。

(36) *Hör mir bloß auf mit diesen Pazifisten!*

(いいかげんそんな平和主義者達の話なんかやめるんだ)

(„Man kann nicht alles haben“)

それでは <関心の与格> が使われなくなると、何か他の手段が用いられていると考えられるが、ここでは „gefälligst“ という副詞が計八箇所使われている。

- (37) Jetzt misch dich *gefälligst* nicht in unsere Angelegenheiten!  
 (もういいかげんにパパとママの問題に口を出すのはやめる)  
 („Das große Familienspiel“ Ursula Haucke)
- (38) Schrei mir<sup>10)</sup> *gefälligst* nicht so in die Ohren...  
 (たのむからひとの耳にむかってでかい声を出すのはやめてくれ)  
 („Bescheidenheit ist eine Zier.“)
- (39) Charlys Vater soll sich *gefälligst* nicht um unsere Angelegenheiten scheren!  
 (チャーリーのパパがうちの家の問題に首をつっこむ筋合はないんだ)  
 („Lob oder Tadel — das ist hier die Frage“)
- (40) Dreh mir *gefälligst* die Worte nicht im Munde rum!  
 (ひとの言葉をわざとねじ曲げてとるのはやめる)  
 (Lob oder Tadel — das ist hier die Frage)
- (41) Hör *gefälligst* mit diesem albernen Gerede auf!  
 (そんなくだらんおしゃべりはやめるんだ)  
 („Vorsicht, Kind fühlt mit“)
- (42) Stelle *gefälligst* nicht so törichte Fragen!  
 (そんなバカげたことを質問するんじゃない)  
 („Alles Nervensache“)
- (43) Und bis dahin laß mich *gefälligst* in Frieden.  
 (だからその時まで頼むからおれをそっとしておいてくれ)  
 („Wenn Charlys Vater alt ist“)
- (44) Rede *gefälligst* nicht so töricht daher!  
 (そんなバカなことペラペラしゃべってるんじゃない)  
 („Erlaubte Spiele“)

以上の例文は〈関心の与格〉が用いられている文と同じニュアンス、即ち父親の不快感を反映した威嚇的なものを持っている。一卷と二巻においては „gefälligst“ が一度も用いられていないことを考えると、この „gefälligst“ には一、二巻で用いられていた〈関心の与格〉と同じ機能が与えられていると考えてよいだろう。しかしなぜ突然に〈関心の与格〉のかわりに „gefälligst“ が使われるようになったのか、おそらくこれには、台本の執筆者の交代などが理由として考えられうるが<sup>11)</sup>、はっきりした理由は

わからない。いずれにせよ、〈関心の与格〉が現代語ではどのような場面で使われているのかということについては理解が得られたことと思う。

#### IV. 〈関心の与格〉と〈心態詞〉

##### IV-1 〈関心の与格〉と〈心態詞〉の比較

〈関心の与格〉が、叙述された事柄に対する話し手の強い関心、または強い要求の気持を写し出す働きを持っていることは今までに確認されてきた。ここでは〈関心の与格〉のこういった働きと類似した機能を持つ〈心態詞〉とのかかわりを探ってみたい<sup>12)</sup>。

〈関心の与格〉が他の任意の与格から区別される一つの特徴として、名詞句や前置句によって代替できないことは先に見た通りであるが<sup>13)</sup>、心態詞の場合には代替可能な場合もある。次に例をあげよう。

##### [A] 命令, 要求, 願望文

- (45) Mach *mir* keine Dummheiten!  
(—45)′ Mach *ja* keine Dummheiten!  
(バカなことするんじゃない)
- (46) Komm *mir* nicht, ohne deine Hausaufgaben gemacht zu haben!  
(—46)′ Komm *bloß* nicht, ohne deine Hausaufgaben gemacht zu haben!  
(宿題をしないうちは来るんじゃないぞ)
- (47) Falle *mir* nicht hin!  
(—47)′ Falle *ja* nicht hin!  
(ころぶなよ)
- (48) Fahr *mir* vorsichtig!  
(—48)′ Fahr *aber* vorsichtig!  
(慎重に運転してよ)
- (49) Daß du *mir* gleich einschläfst!  
(—49)′ Daß du *nur* gleich einschläfst!  
(いいからはやく眠れよ)
- (50) Wenn er *mir* pünktlich nach Hause käme!  
(—50)′ Wenn er *nur* pünktlich nach Hause käme!  
(彼が時間どおりに帰ってくればなあ)

以上の例文から明らかなように、命令、要求、願望の文では〈関心の与格〉は普通 „mir“ という形であられるのだが<sup>12)</sup>、これらの „mir“ はやはり話し手の同じような気持を写し出す „nur“, „bloß“, „aber“, „ja“ 等によって置き換えが可能である。ただし若干のニュアンスの違いがあり、〈関心の与格〉の場合には、話し手が、自分の発した命令、要求や願望が実現されることに対して、自らの利害にかかわる特別な関心をいただいていることが察知され、〈心態詞〉の場合はそれに対して、威嚇、警告、強い希望のニュアンスをより強く帯びることが多いといえる。

### [B] 叙述文

叙述文中で用いられる〈関心の与格〉は „mir“ だけでなく „dir“ も、また場合によっては „euch“ の場合もあるが、話し手が聞き手の注意を喚起したり、威嚇、警告あるいは警き、または陳述内容を強調するという働きを持つ。以下にその例をあげよう。

- (51) Das war *mir* / *dir* ein Spaß!  
(—51)′ Das war *vielleicht* ein Spaß!  
(あれは楽しかったなあ)
- (52) Der fährt *dir* glatt an den Baum!  
(—52)′ Der fährt *ja* glatt an den Baum!  
(おい、あいつ滑って木にぶつかるぜ)
- (53) Der fährt *dir* in 3 Tagen mit dem Fahrrad von Berlin nach Paris!  
(—53)′ Der fährt *ja* in 3 Tagen mit dem Fahrrad von Berlin nach Paris!  
(おい、あいつは自転車でベルリンからパリまでなんと三日間で走るんだぜ)

(51) の場合、 „mir“ の場合、「自分自身にとって」というニュアンスが強いのだが、 „dir“ の場合、相手に同意を求める気持が感じられる。それに対し „vielleicht“ の場合、いずれであるのかは、文脈および状況がないと決定できない。52), 53) の場合は „dir“ の場合と „ja“ の場合ではニュ

アンスが異なる。„dir“ が使われている叙述文では一般に、異常なあるいは非日常的な出来事が描写されていることが多く、話し手が聞き手に対して注意を喚起したり、警告や威嚇を行っているのが普通である。例えば次の文もそうである。

- (54) Der fällt *dir* noch durchs Fenster!  
(おい、あいつ窓からおっちそうだぜ—[なんとかしろよ])
- (55) Er bringt *dir* noch die ganzen Papiere durcheinander!  
(おいみるよ、あいつ書類をめちゃくちゃにしてるぜ—[なんとかしろよ])

ところが〈心態詞〉„ja“ を使った場合は警告、威嚇というよりも、警きが前面に出てくる。

- (56) Der fällt *ja* noch durchs Fenster!  
(あつ、あいつ窓からおっちるぜ)
- (57) Er bringt *ja* noch die ganzen Papiere durcheinander!  
(あつ、あいつ書類をめちゃくちゃにしてるじゃないか)

このようなニュアンスの違いは〈内在的〉(illokutiv) なものなのであり、アクセントやイントネーション、語気などの要素も重要な役割を果たしているので、文字だけで日本語に訳出することは困難であり、また危険でもあるのだが、これらの語が使われる対話場面では情報伝達の上で重要な役割を担っているのがわかるだろう。

#### IV-2 〈関心の与格〉と〈心態詞〉の共起 (Kookurrenz) の問題

〈関心の与格〉は〈心態詞〉によって、ほぼ文の意味を変えることなく代替することができる場合があることは先程見た通りだが、そればかりか、この二つは一つの文の中で一緒に連続して使われることも多い。そしてこの傾向は命令、要求、願望の文において特に顕著である。

- (58) Rede *mir doch nur*!  
(いいからしゃべってくれよ)—[頼む調子]
- (59) Verrate *mir nur* das Geheimnis nicht!  
(いいか、この秘密は黙ってるんだぞ)—[威す調子]

- (60) Falle *mir ja* nicht hin!  
(いいかい、ころぶなよ)―[警告]
- (61) Fahr *mir aber* vorsichtig!  
(慎重に運転しろってば)―[強調]
- (62) Daß du *mir aber ja* rechtzeitig wieder da bist!  
(ちゃんと遅れないように戻ってくるんだぞ)―[警告]
- (63) Das war *mir / dir vielleicht* eine verrückte Party.  
(しかしまあひどいパーティだったな)―[強調]
- (64) Das ist *mir mal* eine große Wohnung.  
(しかし広い住居だなあ)―[驚き]

ここで我々にとって一番興味があるのは、〈関心の与格〉と〈心態詞〉が一緒に使われた場合に生ずるニュアンスについてである。収集した例文<sup>14)</sup>、およびそれをもとにして行なったインフォーマントテスト<sup>15)</sup>により文のタイプ別に〈関心の与格〉と〈心態詞〉の使われ方を調査した結果は次のようにまとめられる。

	関心の与格		心態詞
命令 要求 } 文 願望 }	mir	話し手の利害にかかわる特別な関心	威嚇, 警告, 要求 ja, nur, aber, doch など
叙述文	dir	聞き手に対する注意喚起, 警告, 威嚇	強調, 驚き vielleicht, ja, mal など

もちろん〈関心の与格〉と〈心態詞〉とのすべての組み合わせが、その役割分担をこの表で説明できるとはいえないが、大部分は可能であろう。

すなわち〈関心の与格〉で「話し手の特別な関心」が示されたり「聞き手に対する注意喚起」が行なわれ、さらに〈心態詞〉で「話し手の要求, 警告, 威嚇」や「驚き」が強調されるということである。もちろん文全体のニュアンスというものは、〈関心の与格〉と〈心態詞〉の持つニュアンスを単純に加算したものでなく、二つの語が一つの文の中で一体となってある特定のニュアンスを生み出すものではあるけれど、一応このような役

割分担を目安として知っておくことは無駄ではあるまい。

最後に語順の問題について触れておきたい。〈関心の与格〉と〈心態詞〉の語順は上の例文すべてが語っているように、必ず〈関心の与格〉+〈心態詞〉という語順となる。このことはドイツ語の配語法の原則によっても明らかであるが<sup>16)</sup>、試みに〈関心の与格〉と〈心態詞〉の語順を入れ替えてみると、語のもつ機能がかわったり、非文とはいかないまでも、ドイツ人の語感にとっては奇妙な文ができあがってしまう。

(65) Rede *mir doch nur!*

E.D. M.P. M.P.

(いいから話してくれよ)

(-64)' Rede *doch nur mir!*<sup>17)</sup>

M.P. G.P. D.C.

(ぼくだけに話してよ)

(66) Verrate *mir nur* das Geheimnis nicht!

E.D. M.P.

(いいかいこの秘密は黙っているんだぞ)

\*(-65)' Verrate *nur mir* das Geheimnis nicht!<sup>18)</sup>

G.P. D.C.

(ぼくだけにはこの秘密は黙っている)

(67) Daß du *mir aber ja* rechtzeitig wieder da bist.

E.D. M.P. M.P.

(ちゃんと遅れないように戻ってくるんだぞ)

\*(-66)' Daß du *aber ja mir* rechtzeitig wieder da bist.

M.P. M.P. D.C.(?)

## V. むすび

以上現代語における〈関心の与格〉について、〈任意の与格〉の中での位置づけ、実際に使われている場面、そして〈心態詞〉とのかかわりについて考察してきた。先にも述べたように、使用される場面が、日常会話の口語に限定されており、しかも対話者同志の関係が親密なものであるという条件がつくため、我々外国人のドイツ語学習者には、なじみがうすく、その実体も握みにくいものであるが、〈関心の与格〉が実際の会話の場面においてどのような役割を果しているかを知っておくことは大切であることは理解していただけたと思う。

ただ今回残念であったのは、叙述文の中で使われているものに関しては、文脈付の例文を十分に集めることができなかつたことである。しかしそれも〈関心の与格〉は現代語においては、ほとんどが命令文の中でしか使われないという主張の裏付けとなるものかもしれない。単なる推則の域を出ないことだが、叙述文においては、〈心態詞〉がこの役割をもつぱら担っているのではないかという気がする。しかしこれを顕証するには、〈関心の与格〉と〈心態詞〉の通時的研究が必要であることは言うまでもない。

#### 注

- 1) Ethischer Dativ の訳語に関しては、〈情操的三格〉(橋本文夫: 詳解ドイツ大文法 1981, 624 ページ), 〈利害関係の三格〉(関口存男: 新ドイツ語文法教程 1980, 88 ページ), 〈関心の三格〉(桜井和希: 改訂ドイツ広文典, 433 ページ), (相良守峯: ドイツ語学概論 1965, 145 ページ) 〈感情の三格〉(丸山武夫: ドイツ文法小辞典 1982, 630 ページ) 等がある。
- 2) 〈任意の与格〉をこのように下位分類したのは、これまでの研究者が行った分類を最大公約数的にまとめたものである。たとえば Schmidt, W: Grundfragen der deutschen Grammatik, 1966, S. 148 ff., Abraham, W: Der „ethische“ Dativ, 1971, S. 114 ff., Engelen, B: Untersuchungen zu Satzbauplan und Wortfeld in der geschriebenen deutschen Sprache der Gegenwart, 1975, S. 116 ff., Engel, U: Syntax der deutschen Gegenwartssprache, 1977, S. 177 ff., Helbig, G: Die freien Dative im Deutschen in DaF 6 / 1981, S. 321 ff., Wegener, H: Der Dativ im heutigen Deutsch, 1985, S. 111 ff., Eisenberg, P: Grundriss der deutschen Grammatik, 1986, S. 283 ff., Rosengren, I: Gibt es den freien Dativ? in DaF 5 / 1986, S. 274 ff.
- 3) Schmidt, W: a.a.O., Abraham, W: a.a.O. Engelen, B: a.a.O., Helbig, G: a.a.O., Wegener, H: a.a.O..
- 4) 岩崎英二郎「副詞の再検討」(「藝文研究」四十三号, 1982) 417 ページ。
- 5) 判定基準は Wegener, H: Der Dativ im heutigen Deutsch, 1985, S. 119 を参照。
- 6) Duden: Grammatik, 1973, S. 529.
- 7) Engelen, B: a.a.O. S. 117.
- 8) Wegener, H: a.a.O. S. 50.
- 9) Wegener, H: a.a.O. S. 98. „Bei Verben, die Veränderung zum Schlechten hin, negative bewertete Vorgänge also bezeichnen, gilt der Dativ als Dativ incommodi (Engelen 1975, Engel 1977, Helbig 1981), sowohl bei transitiven als auch bei intransitiven Verben.“



- 10) この „mir“ は in die Ohren という名詞句によって要求される Pertinenz Dativ〈所有の与格〉である。
- 11) この Hörspiel の台本執筆者は複数おり、その名前も示されている、そして〈関心の与格〉を用いている執筆者も一人だけに限られているということもなく、突然 „gefälligst“ が使われるようになったのも単なる執筆者の交替だけではないように思われる。
- 12) 〈関心の与格〉と〈心態詞〉の類似性についてはヘルビヒ、ヴェゲナー、ローゼングレン、アイゼンベルク等が言及している。Helbig, G: a.a.O. S. 330 f., Wegener, H: a.a.O. S. 51 f., Rosengren, I: a.a.O. S. 287 f., Isenberg, P; a.a.O. S. 84 f.
- 13) Es wird **uns** doch nicht regnen. (雨が降らなきゃいいんだがなあ) という例もなくはないがこれはむしろ例外と見做すのが妥当であろう。
- 14) 例文の収集源は主として〈任意の与格〉に関する論文、文法書、そして „Papa charly hat gesagt“ 等である。
- 15) インフォーマンテストには四人のドイツ人に協力いただいた。
- 16) Weydt, H: Kleine deutsche Partikellehre, 1983, S. 157 f.
- 17) M.P.=Modalpartikel, G.P.=Gradpartikel, D.C.=Dativus Commodi
- 18) D.O.=Dativobjekt